

黙々と延々と。思いは幾重にも ワカメ加工を手伝ってきました

広報委員会委員 佐藤聖子



東日本大震災の被災地へのボランティア活動が再開され、東京都・関東支部役員会が3月26日から3日間、第一陣として宮城県気仙沼市のワカメ工場で作業してきました。その活動を特別にレポートします。

「今回は漁業支援でワカメの煮出しをする予定なので、長靴と合羽を用意してください」というのが、参加者への指示でした。ワカメの作業とはいったい何をするのか想

像もつきませんでした。また、現実に被災地を見たらかなり動揺してしまうのではという不安や、作業内容の実感がわかないためいろいろな「？」を持つ私を乗せながら、白石隊長が運転する車は南三陸町への道を辿ります。

高速道路から自動車専用道路を通り、ついに映像や写真で何度も見た被災地の風景が広がる海沿いの道へ。砂埃が舞い、線路や橋などの巨大なコンクリート製の建造物が破壊され、人が住んだり活動したりする建物が無いなんとも寂しい空間に、私は何かつぶやくこともできなくなりました。

そして訪れた鉄骨だけになった防災対策庁舎には、焼香台と献花千羽鶴が捧げられ、訪れる人の悼む気持ちが表示されていました。私たち一行も焼香させていただきましたが、夕暮れの中、後から後から訪れる人が絶えません。誰もが



作業のための準備をする佐藤さん(左端)

庁舎の鉄骨を見上げ、焼香し手を合わせる姿に、この地で受け取った悲しさと同時に、人としての何か暖かい心のようなものを感じたりもしました。

さて翌日は早め起きて、いよいよボランティア活動開始です。作業場所が気仙沼に変更になり、1時間ほどかけて車で移動しますが、被災

地の中を通過していくので、みんな信じられない光景を見せつけられて驚くだけです。こんなに大きな船が…、あんな高いところに車が…、瓦礫の山が延々と続く…、壊れた車が整然と積み重ねられて…、どの言葉も…で終わるしかないのです。

しかしその風景の中をたくさん車が走り、工事車両を多く見かけ、とにかくなんにしても今、復興に向けて活動しているのだというエネルギーがそこにはありました。それはお手伝いしたワカメの加工工場でも存分に感じました。

ワカメは3月から5月が収穫最盛期なのだそうですが、季節感あ



ふれるボランティア活動と言えます。この工場には海からワカメが水揚げされ、連日塩蔵加工に追われていました。いくつもの工程があるのですが、

そのいずれも単純な作業を延々と続けるパターンです。日頃ホールスタッフとして走り回っている山下さんが「玉箱4箱持つ

より重いです(泣)」というほど、ワカメは重く、夜はさっさと眠ってしまうほど疲れます。

黙々と延々と流れるように作業をするうちに、人へのサービスを仕事とする第三次産業の私たちが、自然を相手にする第一次産業を経験している不思議さを感じました。自然と共に生きて、自然から恵みをいただき生活の糧とする生き方の真剣さや豊かさやたいへんさを最初は感じました。しかし行き着くところは、仲間や家族や人の笑顔なのかも、などと思ったりもし、ボランティア活動をしに行ったりも、思うこと、感じることは、かなりの時間になりました。